Brighton Rock のいくつかの疑問点について

植　木　利　彦

岡山理科大学教養部

（1993年9月30日　受理）

I

Brighton Rock については，批評家の意見は様々である。宗教的な面の「善と悪」，「堕地獄と救済」，社会的な「正と不正」，サスペンス的な「追う者と追われる者」といった面に注目している ***A.*** デヴィティスや ***F.*** クンケルなどは高い評価をしている。[1] 一方，人物描写や小説の構成に注目している ***J.*** アトキンズなどはかなり厳しい批評をしている。[2] この小論では，*Brighton Rock* の構成面に注意を向け，構成上の疑問点をいくつか指摘して，その理由を言及してみたい。

II

アイダが，ヘイルを遊園地の回転入口のところに待たせておき，洗面所へ行き，そこから出てきてヘイルがいないのに気がつき，彼も洗面所に行ったのであろうと考えて，待つことにしたが，その時，町の時計は1時半を知らせた（"She prepared patiently and happily to wait for him to return. She was a sticker. A clock away in the town struck half-past one"）。[3] この文章からは，"prepared" と "struck" の間に10分も20分も時間的経過があったとは考えられない。そうすると，ヘイルは彼女が洗面所に行っていた僅か4分足らずの間に拉致され，何処かで殺害されたことになる。ピンキーはその殺害を隠蔽するためにアリバイ工作をしている。2時15分前に遊園地の射的場の店主に時間を聞き，2時10分前には仲間（スパイサー，ダロー，カビット）と待ち合わせる予定の桟橋の喫茶店でウエイトレスに時間を確認している。ピンキーは，約束の時間に遅れて来たダローとカビットに腹を立てながら，" 'Did it go all right?' " と尋ねている。そしてダローは，" 'It was beautiful, . . Me and Cubitt planted him. We gave the cards to Spicer' " (p. 25)，と答えている。次に，弁護士のプルウイットを海外に出した後，ダローとジュディー，ピンキーとローズが集まった喫茶店では，"This was the tea-room to which they had all come after Fred's death — Spicer and Dallow and Cubitt" (p. 279)，となっている。これらの文章から判断すると，1時20分から1時50分までの30分足らずの時間でヘイルを拉致し，殺害しなくてはならない。そこで，ピンキーは，スパイサー殺しの計画を立て，アリバイ工作をするのが任務のように考えられる。そして実行犯はダローとカビットであり，ヘイルが2時ま

で生きていたように思わせるためのコリー・キバーのカードをヘイルの通過予定時間に合わせて，そっと人目につかない所に撒いていくのがスパイサーの役目であろう。ところが，ピンキーとダローの話しでは，“ ‘You're the dumb one, Dallow. She (i. e., Rose) knows a lot. She knows I killed Fred' ” (p. 252)，という。市役所で結婚式を挙げた後，ローズを連れて殺人現場の菓子屋に来たとき，“He (i. e., Pinkie) looked around the pink barred cell as if he owned it; his memory owned it, it was stamped with footmarks, a particular patch of floor had eternal importance: if the cash register had been moved he'd have noticed it” (p. 221)，とピンキーが実行犯の一人であるように記述されている。ピンキーも実行犯であるとするならば，時間的余裕をもたせても1時20分からピンキーが射的場で時間を確認した2時15分前までに一人の大人を拉致し，殺害して海岸に下ろし，アリバイ工作をするという全ての行為をやらなくてはならない。これは常識的に考えても時間的に無理であろう。そうすると，彼らが，ヘイルを拉致したのは，もっと早い時刻で，殺害のための時間やアリバイ工作の時間がもっとたっぷりとあったということなのか？それでは，アイダが聞いた1時半の時報というのは，アイダが10分も20分も回転入口の所でヘイルを待ち続けた後で聞いたものでなくてはおかしくなってくる。それとも，ピンキーは，ヘイルの殺害後，後始末を二人に委せて，一人だけ先に出て，アリバイを工作したのか？いずれにせよ，この日は聖霊降臨節の祭日で，遊歩道に並ぶ各店は書き入れ時なのに，たまたま休業中の店があり，真昼間に大勢の人が行きかう中で，ヘイルをその店に連れ込み殺害したのも，ヘイルの死体を床板を剝がして，そこから海岸に下ろしたのも不自然ではないだろうか？

フランクの家での新婚初夜，グリーンは，“He (i. e., Pinkie) has escaped from Nelson Place” (p. 22)，と記述し，その夜の夢の中でもピンキー “slipped again, down and down into his bed in Nelson Place” (p. 232)，と記述しているが，ネルソン・プレイスはローズの育った所で，“his own home beyond in Paradise Piece” (p. 109) なのである。ネルソン・プレイスもパラダイス・ピースも同じ様な貧民窟であり，ピンキーが，ローズの両親の住んでいるネルソン・プレイスを尋ねたすぐ後でもあり，彼の生まれ育った所と同じような貧民窟であるため，眠っているピンキーの意識の中で両方の場所が混同されているのか？それとも，幾人かの批評家が，Prewitt を Drewitt (J. Atkins と Kenneth Allot & Miriam Forris)，Paradise Piece を Nelson Place (J. P. Kulshrestha)，Frank を Billy (J. P. Kulshrestha) と書いているところから推測して，そのように書かれた版があるのかもしれない。

ピンキーの強さは，*A Gun for Sale* のレイブンと同じくその想像力のなさにあると力説されている (“The imagination hadn't awoken. That was his strength. He couldn't see through other people's eyes, or feel with their nerves”)。(p. 52) しかし，彼は，ヘイル殺し，ローズの自殺に見せかけた殺害計画，コリオニを利用したスパイサー殺害計画

等，並外れた悪知恵を働かせている。"to consider" は "to imagine" とは質的に異なるものであろうが，むしろ "to consider" は "to imagine" 以上に綿密な思考力を必要とするものである。ダローも，ピンキーがローズの殺害計画を胸に秘めて，"But suppose she killed herself?" (p. 254)，という彼の問いかけに対して，"You're imagining things" (p. 254)，と答えている。それに両親の性的関係を見つめていた時，

> His father panted like a man at the end of a race and his mother made a horrifying sound of pleasurable pain. He was filled with hatred, disgust, loneliness: he was completely abandoned: he had no share in their thoughts — for the space of a few minutes he was dead, he was like a soul in purgatory watching the shameless act of a beloved person. (p. 232)

両親が夢中になっているとき，両親の意識のなかから自分の存在が忘れ去られていること，その孤独感をこれほど強烈に意識できる鋭い感受性を持っている者に想像力が無かったと考えられるであろうか？更に，僅か15歳で汽車のレールに頭を寝かせて，予定時刻よりも遅れて来る汽車を待たなくてはならなかった近隣の少女のその引き延ばされた運命の過酷さ，残酷さを，更に少女が死を選ばなくてはならなかった悲しみのなかに，性の快楽の地獄を読み取った思考力に想像力が伴わなかっただろうか？それだけではない。彼は，彼の家庭に極貧の地獄を，学校でのコンパスによる暴力に苦痛の地獄を読み取っている。そして生きていることじたいが地獄であると思い，それに嫌悪感を覚えている人間に想像力がなかったといえるだろうか？

ローズとピンキーは，16歳と17歳で，共に board school（日本の義務教育に相当する学歴）をでただけである。ローズは，初めて仕事に就いて自活し始めたところである。彼女にはまだまだ人生経験は浅く，人を即座に見抜けるだけの能力はないと考えるのが当然であろう。現に，ピンキーが，彼女を愛していないどころか憎んでいることも分かっていない。なのに，アイダと僅か二度会っただけで，しかも，仕事中の短い時間であるにもかかわらず，" 'She wasn't our kind' " (p. 10)，" 'You can see she (i. e., Ida) don't believe a thing. You can tell the world's all dandy with her' " (p. 110)，と言う。ローズは，どちらかといえば，ピンキーの毒牙にかかって，ピンキーのために大罪を犯すという単純な人間なのである。その彼女に人がそう簡単に見抜けるのだろうか？また，人間というものを陽気で楽しく人生を送っている者は，不信心者と簡単に決めつけてしまえるのか？オーエル (G. Orwell) は，ローズのこの理解力に大きな疑問を抱いている。

> In *Brighton rock*, . . . the central situation is incredible, since it presupposes that the most brutishly stupid person can, merely by having been brought up a Catholic, be capable of great intellectual subtlety. . . . his still more limited girl friend understands and even states the difference between the

categories "right and wrong" and "good and evil".[4]

そして，ウオルター・アレン（W. Allen）もピンキーの理解力に疑問を抱いている。

> Is the book successful? Not, I think, entirely; but not for the reason put forward by the *Evening Standard's* reviewer when the novel first appeared: Mr. Howard Spring, it may be remembered, did not see any difference between good and evil on the one hand and right and wrong on the other. The difficulty lies, I believe, in the character of the boy Pinkie; and the difficulty is not one of accepting, but of understanding. In the presence of Pinkie one is in the presence of that order of precocity which in history was Chatterton's and Rimbaud's, and it cannot be said that the years since their deaths have thrown much light on Chatterton and Rimbaud.[5]

ピンキーは，二度目にローズと会った時，コリー・キバーのカードを置いていった人間のことは他言しないようにとローズを脅すのに硫酸の瓶を取り出し，中身をこぼしてみせている。後日，スパイサーの死にローズが疑問をいだき，聞き質しているとき，彼は硫酸の瓶をポケットの中で撫でまわしながら残忍な快感に浸っている。そして最後は自らその硫酸を浴びて，この世から彼自身が消えてしまうのであるが，こうしたことから，彼は，常に硫酸の瓶をポケットに入れて持ち歩いていたと考えられる。当然，競馬の当日も瓶はポケットの中にあったと考えるのが妥当であろう。そこで，当日の彼がコリオニ一味に襲われた光景を見てみよう。

> The men with one accord came round them. . . a boot with heavy nails was lifted, and then he felt pain run like blood down his own neck. . . turned and saw the faces ringing him all round. . . an obscure struggle reached its climax out of his sight. . . they all moved together, coming quickly at him in a bunch. Somebody kicked him on the thigh, . . . (pp. 129-130)

彼は，蹴られ，切りつけられ，地面の上をごろごろと回転して逃げている。ポケットの中の硫酸の瓶は割れずにすんだということがありえるだろうか？

Brighton Rock は，アメリカでは当初，「娯楽もの」(Entertainment) として出版された。それについてグリーンは，*Ways of Escape* で次のように述べている：

> *Brighton Rock* I began in 1937 as a detective story and continued, I am sometimes temped to think, as an error of judgement. . . . The first fifty pages of *Brighton Rock* are all that remain of the detective story; they would irritate me if I dared to look at them now, for I know I ought to have had the strength of mind to remove them and to start the story again —

however difficult the revisions might have proved — with what is now called Part Two.[6)]

ところが，途中から，善と悪，堕地獄と救済，正と不正といった問題が主要なテーマとなってしまった為に，グリーンの関心は，そちらに向かい，探偵小説にとっては非常に大切な些細な細部がテーマが代ったために軽視されたり，また，探偵小説の主人公にはふさわしいが，宗教的な問題を口にするには少々荷が重すぎるような人物が結果的に残ったのであろうか？

III

Brighton Rock には，同じイメージが度々繰り返して使用されている。こうした手法は決して珍しいものではないが，一体，いかなる意味を持つものか，その例を列記して考えてみたい。

ピンキーの家庭は，パラダイス・ピースにあった。そしてローズの家庭は，ネルソン・プレイスにあり，共にその貧しさを共有するものである。それ故に，ピンキーとローズは同じ世界の人間であり，彼らが結婚することは，ピンキーが逃げ出したと思っていた極貧の過去をそのまま引きずっていることになる。

アイダは離婚歴のある女で，ジュディーは結婚している女である。彼女たちは，共に肉感的な身体つきで，適度のアバンチュールを楽しむことは人間の自然な姿であって，何ら恥ずべきものではないと思っている。彼女たちには，キリスト教的な意味での倫理観は全くない。そしてアイダは，造花のすみれ（artificial violet）を，ジュディーは，造花のけし（paper poppies）を持ち歩いている。彼女たちは，奔放な生活にもかかわらず，子供を生んだことはない。ローズが結婚後すぐに身籠ったのとは対照的である。彼女たちの持ち歩く造花は新しい命を生み出すことのない彼女たち自身の不毛性を比喩的に表現したものであろう。アイダは，また，コリオリとも共通点を持っている。アイダは，ローズに向かって " 'I know one thing you don't. I know the difference between Right and Wrong. They didn't teach you *that* at school.' " (p. 258)，という。そして彼女の性格は，"she was prepared to cause any amount of unhappiness to anyone in order to defend the only thing she believed in."(p. 41) 一方，コリオニは，"he looked as a man might look who owned the whole world, the whole visible world that is, the cash registers and policemen and prostitutes, Parliament and the laws which say 'this is Right and this is Wrong'." (p. 78) そして彼も，アイダと同じように自分の利権を護るためには，競馬場でピンキーを痛い目に会わせている。

アイダが洗面所に行っている間，ヘイルは，遊園地の回転入口の所で彼女を待っていたが，その時，ピンキー一味に拉致され殺害された。同じく，コスモポリタン・ホテルでア

イダが証人となるカビットを見つけた時，彼女はカビットに“ 'Just let me put on a bit of powder and have a wash' ”（p. 201），といい，“A wash: they were the words she had used to Fred（i. e., Hale）”（p. 201），とその偶然性に驚いている。そして彼女が，フィル・コーカリに証人を見つけたことを伝えに行った数分の間にカビットも姿を消している。

ピンキー（a kind of hideous and unnatural pride）（p. 4）も，ヘイル（the old desperate pride persisted, a pride of intellect）（p. 10）も非常に自負心の強い男で，その自負心が彼等の行動の推進力となり，敢えて危険を避けようとしないため，自ら破滅の道を盲進することになる。また，ヘイルは，コリー・キバーのカードを通過した場所に残すことによって，自分を捜し求められる手がかりとしている。一方，ピンキーもスパイサーの殺害後，アリバイ工作のため，わざと射的場や喫茶店で時間を尋ね，自分がその場に居た証拠を残している。更に，ローズを自殺に見せかけて殺害しようと企み，ピースヘイブンに出かけて行った時も，“Boy had left too many signs behind him — the message at the shooting-range, at the car-park: he wanted to be followed in good time, in his own time, to fit is with his story.”（pp. 295-6），そしてヘイルは，ピンキーに追われて命を落とし，ピンキーは，アイダに追われて命を落とす。

ピンキーはコリオニ一味の追撃を逃れて，血まみれの状態で助けを求めてローズの働いているレストラン・スノーにやってきて，“He stood on the pavement outside until he saw Rose serve a table close to the window, then went and pressed his face to it.”（p. 134），ローズは結婚した翌日，レストラン・スノーで働いている友人に会いに行き，“through the pane she caught Maisie's eye; *she* stood there with a duster staring back, bony, immature, like her own image in a mirror. And she stood now where Pinkie had stood — outside, looking in.”（p. 242）

スパイサーを殺害した後，ダロー，ジュディー，ピンキーそしてローズの四人が桟橋にある喫茶店に集まっている。そしてピンキーは，“This was the tea-room to which they had all come after Fred's death — Spicer and Dallow and Cubitt”（p. 279），と回想している。

ピンキー一味は，桟橋の下の遊歩道の端にあるブライトン・ロックを売る店にヘイルを連れ込み，ブライトン・ロックを口に押し込み，窒息死させようとしたが，実際は，恐怖の余り心臓発作を起こし，ヘイルは亡くなった。ところが，市役所で結婚した後，ピンキーとローズが時間潰しをしていた時，ローズは遊歩道の方に行こうと言い出し，ヘイルを殺した店の前にきて，ピンキーが，“ 'Well, what's it to be — winkles or Brighton rock?' ”と尋ねると，ローズは，“ 'I'd like a stick of Brighton rock' ”（p. 221），という。

ピンキーは，カイトの後を引き継いだが，“he had prolonged Kite's existence — not touching liquor, biting his nails in the Kite ways.”（p. 273），それだけではなく，カイト

は，カミソリを持ったコリオニ一味に駅の待合室で襲われ，切られて死んだが，ピンキーもコリオニ一味に競馬場で襲われ，カミソリで切られる。

ピンキーは，レストラン・スノーで冷たくあしらわれた後，ローズと一緒にバスに乗ってピースヘイブンに出かけるが，最後の夜も彼女をピースヘイブンに連れて行こうとして，"We'll go the way we went that day. Remember in the bus" (p. 283)，という。

ヘイルはカイトとその仲間を裏切った。ピンキーはスパイサーを，カビット，ダロー，ローズはピンキーを裏切っている。

これらの繰り返されるイメージは如何なる意味を持つものか？その手がかりはピンキーの世界にあるようだ。ピンキーは，彼の両親の世界によって象徴される貧困と性の恐怖から逃れるためにカイトの仲間に加わった。彼は，彼の両親と同じ世界に住んでいるローズの両親を訪ねたとき，"nobody could say he hadn't done right to get away from this, to commit any crime" (p. 177)，という印象を受けたが，彼が金銭的に，物質的に満足している様子は何処にもない。ピンキーと同じような極貧の家庭で育ったローズの目から見れば，ボロ車に尾羽打ち枯らした顧問弁護士，汚くてもいくつもの部屋のある家に住んでいるピンキーの生活は驚きであろうが，ピンキーとコリオニの生活を比較すると，コリオニは高級車にロンドンの弁護士，豪華なコスモポリタン・ホテル住まい，高価な持ち物，どう見てもピンキーの貧しさが強調される。貧富というものは相対的なもので，限りがないということになる。また，小学生の頃のコンパスという暴力が新しい世界ではカミソリという暴力に変わっただけであり，彼があれ程嫌っていた性の世界も同じ屋根の下に住むダローとフランクの女房のジュディーによって繰り返されている。本質的にはピンキーの生活には何の変化も無い。つまり，ピンキーが脱出したと思っていた世界の外には同質の世界が存在しているだけで，それは水に広がる同心円的な性格を持つ。何処まで行っても外の，あるいは異質の世界に逃げ出せるわけではなく，無限の広がりを持つ同質の世界で我々は同じことをしながら生きていることになる。アイダは，" 'Oh, no they don't. Look at me. I've never changed. It's like those sticks of rock: bite it all the way down, you'll still read Brighton. That's human nature' " (p. 247)，というが，このことは，我々の住んでいる世界にも当てはまることであろう。その証に彼の側には彼が逃れてきた世界を象徴するローズが常に存在するし，海岸通りでがらくたを漁る老人，体の半分を無くした乞食，盲目の楽隊等が目撃される。

Ⅳ

次に気になることは，*Brighton Rock* に出てくる人々が動物のイメージと直接結びついていることである。例えば，アイダは白イタチ (ferret)，確かにアイダの執拗さは獲物に食いついたイタチを彷彿させるものがある。コリオニは犬 (something a little doggish)，ダローは犬 (dog)，ローズは鼠 (mousy hair)，コスモポリタン・ホテルで話し込んでい

る二人のユダヤ人女性は(parrots)，ピンキーと同級生であったパイカーは，"bristled like dogs at the sight of each other"。(p. 286) プルウィットの家の地下で生活している奥さんは(mole)，聖霊降臨節の折にヘイルと話しをし，ピンキーの顔も見た彼にとっては非常に危険な女事務員はあかえい (sting-ray)，プルウィットは蛭 (leech)。そして，競馬の当日，人々は (they) "surged like some natural and irrational migration of insects up and down the front." (p. 120)，*Brighton Rock* の世界を蠢く者たちは，ジャングルに生きる獣の如く，強いものが弱いものを襲い，いたぶるのである。コリオニ一味がピンキーを襲う;

> They made no attempt to come in and finish him. He sobbed at them. . . The mob were enjoying themselves, just he had always enjoyed himself. . . Only two men followed him now, and they followed him for the fun of it, shooting him as they might shoot a cat. (pp. 129-130)

そしてアイダのピンキーを追い詰める動機も決してヘイルに対する愛情ではない。彼女は，フィル・コーカリとコスモポリタン・ホテルに宿をとったとき，"If somebody had said to her then 'Fred Hale', she would hardly have recognised the name." (p. 181)，彼女の動機は，暇を持て余した獣がたまたま見つけた弱い動物をいたぶり，からかうような動機に根ざしたものである。フィル・コーカリは彼女の動機について，" 'you're only doing it bacause it's fun. Fred wasn't anyone you cared about' " (p. 177)，という。アイダにとっては "vengeance and reward — they both were fun." (p. 42)，アイダはピンキーだけでなく，ローズにも目を覚まし，真実を知るようにと烈しく迫ってくる。追い詰められたローズは，"Driven to her hole the small amimal peered out at the bright and breezy world." (p. 151)，ピンキー自身もローズに対し，"pinched the skin of her wrist until his nails nearly met." (p. 60)，彼は，ヘイルもスパイサーも死に追いやり，ローズも自殺に見せかけた死に追いやろうとする。ブルワーをカミソリで切りつけ，弁護士のプルウィットを偽の証人に仕立て上げ，彼の弁護士資格も危険に晒す。そこには相手にたいする優しさはなく，常に動物的な自己本位の感情が存在する。そしてローズもコリー・キバーのカードをテーブルの下に残して行ったのはヘイルではなく，スパイサーであるというその事実で，ピンキーを罠にはまった獣のようにガッチリと捉えている。ピンキーは，ローズとの関係を "It was as if the handcuffs were meeting" (p. 171)，と感じている。彼を狙って追っているのはアイダやコリオニだけではない。マラメット (Elliott Malamet) は神もピンキーに告解と改悛をせまっているとする。

> . . . I argue that Ida is but one in a series of "hounds" — Colleoni, the police, his childhood, Rose, God — each representing a different threat to Pinkie.[7]

しかし，神よりも更に強い追手が先にピンキーを捉えて離さない。

> . . . there is something within Pinkie that is even more overwhelming than the pursuit of God: "he couldn't experience contrition — the ribs of his body were like a steel bands which held him down to eternal unrepentance."[8] (p. 700)

Brighton Rock は，グリーンのカトリック小説の先陣を切る作品として一般的には評価されているが，宗教的な面に隠れて描かれている世界は，エンターテインメント的な要素を多分に残しながら，実際には，「正も不正」も存在しない，力が支配する「狩るものと狩られるもの」の殺伐・荒涼とした世界を描いているようにも思える。

Notes

1）デヴィティス（A. A. DeVitiss）は，*Brighton Rock* をピンキーは悪を，ローズは善を，そしてアイダは善の領域と悪の領域の間に存在する世俗の世界と人間性を象徴する寓話的な構成であると捉えている。また，F. クンケルは，この小説をカトリック小説として高く評価し，その著『グレアム・グリーン研究』I（野口啓祐訳編，東京，南窓社，1974年，p. 148）において次のように述べている：「一方には人間苦しんだところでそれで救われるものでないと考え，苦しみに一切効用を認めぬ世界があり，他方には苦しみこそ恩寵をうけるに欠かせぬ条件と考える世界がある。一方に原罪のよごれを拭って知らぬ顔の半兵衛をきめ込む世界があり，他方に原罪の由来を尋ね，その核心に触れようとつとめる世界がある。一方に愛がただ身勝手な衝動の爆発にすぎない世界があり，他方に愛こそ悪を克服する最後の答と固く信じる世界がある。そして一方に罪の真只中にありながら，かえってそのために罪に盲ている世界があり，他方に罪をしっかりと見つめつづける世界がある。こうした二つの世界が，互いに相手を打ち壊そうと激突し合う — それを描くのがカトリック小説の役目なのだ」，と。その他，J. P. Kulshrestha, Maria Couto, R. W. B. Lewis などは好意的な批評をしている。

2）ジョーン・アトキンス（John Atkins）は，（*Graham Greene*, London: Calder and Boyars, 1966）において，社会の不正や人生の悲惨さを認識するには *A Gun For Sale* のレイブン（電気技師）や *It's A Battlefield* のコンラッド・ドローバー（会計係長）のようにもう少し高等な教育を受け，社会に出て，いろんな経験を積んでいないと無理であるという。また，グリーンは，lower middle-class や shady inter-class の惨めさはよく観察しているが，彼が描く労働者階級の人々には実在感がないという。例えば，彼らがいつも使用している "Go on" という言葉使いがほとんどみられないこと，Spicer が "There's free speech in this mob, ain't there?" というが，ギャングの彼らが "free speech" などというのは不自然であるという。ケネス・アロットとミリアム・フォリス（Kenneth Allot & Miriam Forris）は，*The Art of Graham Greene*（New York: Russell & Russell, 1963）において，"As the relationship between Pinkie and Rose unfolds and the themes emerge, *Brighton Rock* loses the characteristically racy manner of an entertainment — which Greene in writing his first chapter intended his story to be — acquires the overtones of the serious novels." という。

3）Graham Greene, *Brighton Rock*（London: William Heinemann & The Bodley Head, 1986），p. 21 以後，同書からの引用は頁数のみを本文中に記す。

4）都留信夫編著，『グレアム・グリーン』，現代英米文学セミナー双書20（京都，山口書店，1982年），p. 220 この書の末尾に "The novels of Graham Greene"（from The Penguin New Writing）by Walter Allen と "Review of *The Heart of the Matter*"（from The Collected Essays and Letters of George Orwell）by George Orwell が掲載されており，それを参照した。

5）Ibid., p. 213

6) Graham Greene, *Ways of Escape* (New York: Washington Square Press, 1982), pp. 59-62

7) Elliott Malamet, "Graham Greene and the Hounds of *Brighton Rock*"*Modern Fiction Studies* No. 4 Vol. 37 (Winter 1991), p. 690

8) Ibid., p. 700

Some Problems on *Brighton Rock*

Toshihiko UEKI
Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan
(Received September 30, 1993)

There are many different opinions of critics on *Brighton Rock*. This book is highly evaluated by A. A. DeVitis, F. L. Kunkel and others who pay attention to religious aspects as "good and evil", "damnation and salvation", social aspects as "right and wrong", and so on. On the other hand, the book is given very severe comments by J. Atkins and others who pay attention to the book's structure and the way to describe the characters.

In this paper, I want to point out the structural weakness of *Brighton Rock* and iuvestigate to the reason why such problems occured.